

空腹なるか又はのんとのかわいたのでありませす。

此場合には湯をさまし興へるか、又は家にかへして乳を興へなければなりません。

(五) 眼を細めるか、又眼の中に少しくうるみを持ち力なく音調を亂して泣くのは

眼氣の催した時であります

此場合にはぐらくしないうらに負ひかへさせ頭巾をぬがせて頭を静かになせるがよくあります。

(六) 眼をあき涙を出さずして眼中に少しく光をおび手足をもがき、全身に力を入れて泣くのは、身体

の發育上必要があつて泣くのであります。

此場合には十分か十五分位は其まゝおきて、音の低さを度として子守の背より下して抱くか、

再び負ひかへさせて嬰兒の背を軽くぼんくたゝいてくれるがよくあります。

嬰兒負ひ方の注意

結びつけ負ひ方に就きてのおびは長さ九尺の天竺大幅木綿を用ふるを尤も好しとす。

此おびを嬰兒の背より左右の腋下にとりて子守の双肩に懸くる所は成るべく緩め置くべし。

それより子守の胸の前にて一つ結び後へまわし嬰兒の臀部に掛くる所はおびを擴げてお臀を包み適宜しつかとして前に廻し結ぶべし。

上部を緩め置くは胸部を壓迫せぬ爲めにして、下部を緊縛するはずり下らぬ爲めなり。

此くの如くせば嬰兒は臀部を以て腰を掛けたる如くせば、上体は稍自由に動し得る様になるべし。

石の負ひ方は鳥渡六ヶ敷様に見ゆれども、少しく稽古すれば他人の助けを得ずして子守の一手一つに容易に負ふことを得るに至るべし、而して子守は毎休憩時間に嬰兒を卸してはいかり(兩便)をさせ少し遊ばせて再び負ひ直すを以て常に正しき負ひ法とするなり。

乳の少きを多く出す法

相州腰越 平岩學洋

世には子を持ちて乳の出ない爲めに命の掛代へといふてもよい様な愛子を自分の膝下に於て育てる事が出来ない爲めにやむを得ずさと子に出し、或は乳母を雇ひて養育するのでありますが、中々自分の膝下に於て育てるやうにはまいりません、實に母親の爲めにも其の子のためにも甚だしき不幸

でござります、私は此等不幸諸君の爲めに乳の少きを多く出す新法を御紹介申し升、これは私の明友の細君の兼て實行して其の効を表したのであります。

先づ極上等の餅米二升をいり鍋にて少し煎りまして、其れを挽臼にて細末にひきまして極く細かなる篩にて通すのであります、そふして其の粉を黒胡麻の粉三合と、午莠種の粉末二合と、以上三種とをよく混合して、更に最上等白砂糖百二十匁を加へまして能く攪拌まはしてこしらへるのであります、用法は毎日三回(朝晝晩)一度に六匁宛を白湯にて内服するのであり、食事の前後何づれにても差支へはなきなれ共、經驗上からは食事の前がよい様であり升、斯様に引續きまして用ゆる事三ヶ月間なれば、乳の出でくることだんく